

はくさんろく いっごういっき きよてん やまじろ
白山麓の一向一揆の拠点となった山城

とり ごえ じょう あと ふ とげ じょう あと

国指定

鳥越城跡と二曲城跡

〔国史跡の名称は「鳥越城跡附二曲城跡」です〕

鳥越城跡…白山市三坂町、別宮町、釜清水町、上野町 二曲城跡…出合町



旧石器

縄文

弥生

古墳

奈良
平安

鎌倉
室町

戦国

江戸

明治以降

集落

役所

生産

城館

信仰

交通

墳墓

その他



とりごえじょうあと ふくげん ほんまるもん ますがたもん
 鳥越城跡に復元された本丸門と枡形門

とりごえじょう
 鳥越城は手取川と大日川の中央に形成された尾根上に、ふとげじょう
 二曲城は大日川の対岸に、ともに戦国時代に白山麓一向一揆の拠点として築られました。

とりごえじょうしゅ ほんがん じもん とすずき
 鳥越城主は本願寺門徒鈴木出羽守で白山麓本願寺門徒の総大将でしたが、織田信長配下柴田勝家の謀略で殺害されました。

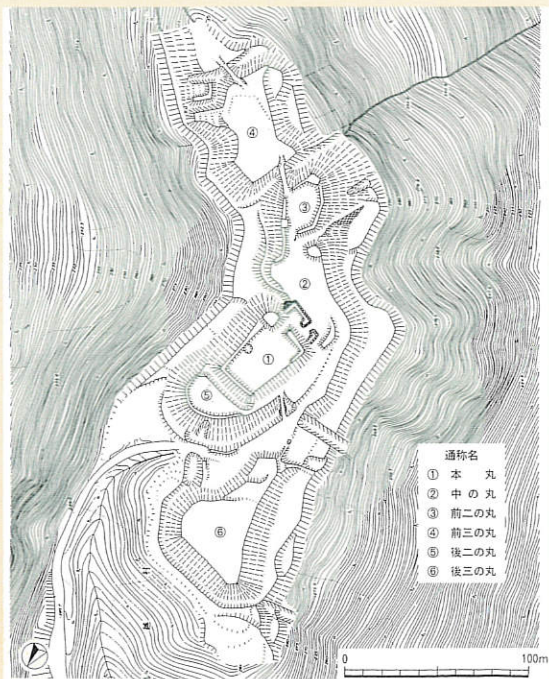
げんざい はくつちよう さ もと し
 現在、発掘調査に基づいた史跡整備が順次行われています。



とりごえじょうあと ふとげじょうあと いち
 鳥越城跡と二曲城跡の位置

鳥越城跡の主要遺構図

本丸を中心として、前後に、二の丸、三の丸が空堀、腰郭で結ばれています。平坦地の郭は南の方の尾根にもいくつか点在します。



発見された遺物

本丸北東部より出土した金板片。欠けた部分は切り取られ、「軍資金」として使われたのでしょう。



鳥越城跡の攻防に使われた鉄砲玉と小刀。小刀は食事の調理にも使用されたと思われる。



鳥越城跡・二曲城跡

鳥越城跡は白山市三坂町、別宮町、釜清水町、上野町 二曲城跡は出合町
 交通 ●小松空港からタクシー約30分、北陸自動車道小松ICから国道360号線で20km
 問合せ先 ●白山市立鳥越一向一揆歴史館
 ☎076-254-8020

白山市立鳥越一向一揆歴史館

白山市出合町甲26
 映像機器により、一向一揆の移り変わりが理解でき、鳥越城跡出土品により、城跡で行われた戦い、生活の状況を知ることができます
 開館時間 ●午前9時～午後5時
 休館 ●月曜日（ただし祝日の場合は翌日）、年末年始、館内特別整理期間
 利用料金 ●大人300円、小中学生無料（団体15名以上は大人250円）
 問合せ先 ●鳥越一向一揆歴史館
 ☎076-254-8020

鳥越城と石山合戦



史跡鳥越城跡附二曲城跡

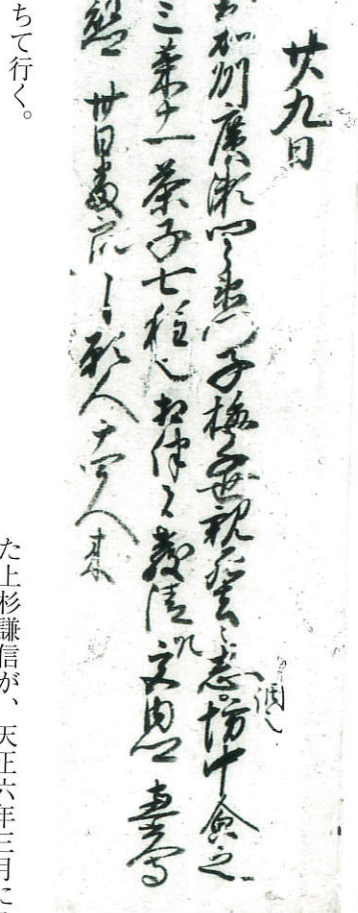
鳥越城の築城年代は明確にはわからないが、元亀元年（一五七〇）から石山本願寺合戦が開始されると、全国の本願寺門徒が本山を支援する戦闘体制に入ることから、この石山本願寺合戦を契機として、白山麓本願寺門徒の中枢機関として、現在の遺構を有する鳥越城が築城、整備されたものと思われる。

鳥越城を中心として、周辺の峰々には、砦的な防備施設が設けられ、鳥越城を中心として、白山麓の要塞化が図られる。鳥越城の城主鈴木出羽守の指揮をうけた、白山麓本願寺門徒についての資料はないが、『天文御日記』には、白山麓から本願寺へ上山した本願寺門徒が見え、活発な人的交流がうかがえる。享祿

の錯乱後、金沢御坊の成立により、白山麓の本願寺門徒は、金沢御坊の指揮下で、石山本願寺を支援、鈴木出羽守を中心に活躍したと思われる。

しかしながら、天正八年

（一五八〇）閏三月になると、顕如は織田信長に抗しきれず、朝廷の仲介により、和解の道を選ばざるをえなくなる。顕如は石山本願寺を退出し、紀州の鷲森へ落



『天文御日記』 天文22年閏正月29日（京都市 西本願寺所蔵）広瀬梅千世は鳥越村広瀬の本願寺門徒。

上杉謙信が、天正六年三月に急死したことに伴い、動揺せず忠節にはげむことを求めたものである。

②天正八年卯月一日の書状は、石山本願寺合戦終結をふまえ、織田方との戦闘をしないよう求めたものである。

③天正八年八月三日の書状は、石山本願寺合戦終結の際に、顕如と行動をとみにせず、織田信長との徹底抗戦を主張し、石山本願寺に残留した、顕如の長子教如の行動を非難し、支援しないことを求めたものである。

天正八年四月に金沢御坊を、織田信長の家臣柴田勝家が攻略し、柴田軍は白山麓へ向かうこととなる。手取川をさかのぼってくる柴田軍に対し、鳥越城主鈴木出羽守に指揮された白山麓本願寺門徒は、



鈴木出羽守守本尊（北海道 齊藤昇氏所蔵）

長門守兼光の御書
 天正八年八月三日
 顯如消息控 (京都市 西本願寺所藏)

天正8年8月3日 顯如消息控 (京都市 西本願寺所藏)

一、鳥越城主鈴木出羽守が、顯如の書状をいかなる思いで拝読したか知ることほできない。しかし、柴田勝家の調略により、松任城において、鈴木出羽守が謀殺されることをふまえるのと、顯如の意をふまえて、松任城へ出か

一、鳥越城主鈴木出羽守が、顯如の書状をいかなる思いで拝読したか知ることほできない。しかし、柴田勝家の調略により、松任城において、鈴木出羽守が謀殺されることをふまえるのと、顯如の意をふまえて、松任城へ出か

天正8年(カ)7月6日 波々伯部秀次書状写 (『別本歴代古案』東京大学史料編纂所所蔵影写本)

六月十七日 柴田勝家 個々の加別一揆
 歴々者少くして、
 松任城へ進上別松原町へ

若林長門 若林水木助 若林基八郎
 宇津呂丹波 宇津呂夜八郎
 岸田常徳 岸田新中郎
 鈴木出羽守 鈴木右衛門 鈴木治左衛門
 鈴木太右衛門 鈴木兼左衛門 菅田大右衛門
 岸田新八郎 岸田新五郎 菅田市介
 徳田次郎 三林善次郎 黒川虎造
 信長云 済威不斜了也

『信長公記』天正8年11月17日条 (京都市 陽明文庫所藏)

勇猛果敢に戦い、柴田軍を手取川の地形を生かした巧みな戦術により撃退する。柴田軍に徹底抗戦した、鳥越城主鈴木出羽守が、顯如の書状をいかなる思いで拝読したか知ることほできない。しかし、柴田勝家の調略により、松任城において、鈴木出羽守が謀殺されることをふまえるのと、顯如の意をふまえて、松任城へ出か

けたものとも思われる。城主を謀殺された鳥越城は指揮権を喪失し、天正八年(一五八〇)十一月に落城する。
 天正八年霜月十七日、鳥越城主鈴木出羽守一族をはじめとする北陸の一向一揆の指導者の首級が、信長の首実検にさらされる。
 天正八年に落城した鳥越城は、その後天正九年、天正十年の二カ年二度にわたり、白山麓本願寺門徒と柴田勢との間に攻防が行われるが、天正十年三月の、本願寺門徒掃討により捕らえられた、三百余人の本願寺門徒が、残雪を朱に染めながら磔刑に処せられ、白山麓に人影が見られない状況となり、北陸の一向一揆が終結する。
 しかし、天正十年六月に、本能寺の変により織田信長が没すると、豊臣秀吉、徳川家康へとめまぐるしく政権が変動する。白山麓は、ほぼ前田利家の加賀藩が支配することになり、かつての本願寺門徒が村を復興し、たくましく白山麓で生き抜くこととなる。(波佐谷 聡)

発掘された鳥越城



鳥越城跡・二曲城跡の米軍撮影航空写真

鳥越城跡は、昭和五十二～五十四年（一九七七～七九）、平成二～十四年（一九九〇～二〇〇二）にいたる期間に、十五次の発掘調査が実施された。

昭和五十二年から五十四年の三カ年間は、城の郭配置や遺構状況を確認したもので、榊形門、前二の丸、後三の丸の発掘調査が実施された。

この調査では、榊形門としての遺構と門礎

石が検出された。後二の丸では、礎石隅櫓跡が二棟と、複数の掘立柱建物跡が検出された。特に、郭中央部西側で、階段を伴う土室状の土坑跡が検出され、多量の遺物が出土した。また、鳥越城跡の郭配置は、空堀と腰郭で各郭をつなぐ、連郭式城郭であることが明らかにされた。

鳥越城跡は、昭和六十年九月三日に、関連史跡である二曲城跡とともに国の史跡に指定されるが、史跡整備を目的として、平成二年度から鳥越城跡前二の丸、中の丸西側、榊形門前の発掘調査が行われ、中の丸では、前二の丸との間に、門跡（中の丸門）が検出された。中の丸西側では建物跡が、また、榊形門前では小鍛冶跡が検出された。



平成四年と平成五年にかけて、榊形門石垣の調査が行われた。石垣の内部には、前段階の石垣が築かれた事が確認され、本丸門に伴うものであれば、鈴木出羽守構築の可能性が考慮された。特に、西側の石積の内部に、明らかに桐木をともなった古式穴太積み



榊形門石垣発掘と古式穴太積み石垣

と思われる石積が確認され、築城にかかわった技術者集団の存在が裏付けられた。この榊形門の発掘と並行して、平成五年と六年度にかけて、鳥越城跡本丸の発掘調査が行われた。平成五年度は本丸西

側、平成六年度は東側である。本丸発掘調査は好天に恵まれ、調査作業員の人達も、生き生きと作業することができた。

鳥越城跡本丸は、発掘調査により六期の建物変遷が確認された。掘立柱建物跡と礎石建物跡が重なりを持ちながら検出



本丸調査後の空撮



大堯出土状況写真

され、天正八年（一五八〇）から同十年にいたる期間に行われた攻防戦の跡と思われるが、鈴木方と織田方が構築した建物跡を決定づけることはできなかった。本丸北側の礎石建物跡の北東隅に越前焼の大甕が三つ、頸部まで地中に埋められた状況で検出された。穀物類の保存、濁り酒の製造に使用したと思われる。

本丸東側中央に、発掘調査前から大きくぼみがあり、遺構を確認した。深さ

五尺余まで底部を下げた確認したが、底は検出されなかった。窪みの周囲には、一部石積が行われており、遺構検出状況からは、井戸跡としか判断できなかった。本丸発掘調査で出土した遺物で特筆されるのは、金板片である。表面に刀によるものかと思われるキズがあり、縦二・五センチ、横一・九センチ、厚さ一・二センチのものであるが、中世城郭調査では前例のないものである。

本丸望楼台には、盛土による構築跡が認められ、本来は、西側土塁とあまり高低差がなかったものと思われる。

平成九〜十一年（一九九七〜九九）度は、「史跡等活用特別事業（ふるさと歴史の広場）」（国庫補助）の実施にともなう遺構確認と発掘調査である。

平成九年は、中の丸西側礎石建物の範囲確認、後二の丸西側空堀の遺構確認で、平成十年は、鳥越城跡の縄張分析にもとづき、西側腰郭の構築状況確認し、この腰郭から中の丸門へ至る路跡の遺構確認をした。また、後二の丸の遺構確認も実施した。平成十一年は、本丸と後二の丸

間の空堀と本丸西側平坦地の遺構確認を実施した。

平成十年度西側腰郭の遺構確認は、盛土状況は確認できたが、城としての防備施設等は確認できなかった。後二の丸では、東側を盛土により拡張、造成したことが確認され、東側へ少し傾斜する地表面に、礎石建物跡一棟と掘立柱建物跡二棟の範囲が確認できた。平成十一年度の後二の丸と本丸間の空堀は、底部が通路の役割を有した箱底の状況で検出された。この遺構状況は、平成九年度に調査した、後二の丸西側空堀においても確認された。

平成十三年と十四年に、後三の丸とアヤマガ池周辺について、遺構確認の発掘調査を実施した。

平成十三年は、後三の丸を中心としたもので、中低地の平面および上部平地東側において、掘立柱建物を構築したことは確認されたが、建物範囲を明確にはできなかった。

平成十四年度は、アヤマガ池を中心としたもので、後三の丸北側空堀と、後二の丸西側空堀が、林道下を通り後三の丸

北東側で結合し、底部を形成する空堀状況が確認され、底部の南側で、後三の丸東側裾部より空堀に水をもたらしていた木樋が検出された。なお、後二の丸西側空堀の南端部に検出されていた石垣と林

道間の地を調査したところ、土橋の石垣が検出された。

鳥越城跡の原地形は、榊形門あたりからアヤマガ池方面に流れる谷川があったものを、本願寺門徒の人達によって、谷

川などの自然地形の機能を生かしながら、郭が作られたもので、天正八〜十年に至る攻防により、織田軍は、前二の丸から後二の丸の区域を中心に、織田方の城作りをしたと思われる。（波佐谷 聡）



水注



金板片



小刀、鉄砲玉



染付皿、盃

国指定史跡鳥越城跡附二曲城跡

鳥越城跡と二曲城跡は、昭和六十年（一九八五）九月三日に国の指定史跡となり、平成三年（一九九一）から、順次発掘調査結果にもとづき史跡整備を実施した。

前二の丸、櫛形門石垣と、釜清水地区から中の丸東側に至る遊歩道などの整備を、平成三〇八年にかけて実施した。平成五年と六年にかけて、鳥越城跡本

上部の、鳥越城跡主要遺構について、史跡整備を実施することとなった。

本丸の建物復元については、文化庁復元検討委員会で協議していただいた。その結果、中世城郭の建物復元は全国的に事例がなく、復元根拠について不明な点が多いことから、鳥越城跡本丸の建物復元は、門復元等にとどめ、今後の研究や発掘調査事例をふまえて実施することとした。

また、中の丸西側で検出された礎石建物遺構について、復元建物として承認されなかったが、周囲の史跡環境と違和感を生じない、「屯舎」という、史跡の管理、活用施設として、建築することとなった。



鳥越城跡主要遺構付近

丸が全面発掘調査され、本丸の建物遺構が良好に検出されたことから、建物復元を中心とした史跡整備が協議された。その結果、「史跡等活用特別事業（ふるさと歴史の広場）」（国庫補助）の事業採択を受けて、平成九〇十二年にかけて、本丸を中心としたアヤマガ池から

本丸の建物跡については、掘立柱建物

跡は、切丸太で柱跡を表示し、礎石建物跡は、手取川川原石を模擬礎石として柱跡表示した。さらに、見学者が建物範囲の広がりや境界を見てわかるように、透水性真砂土舗装と界線切石を色違いにし、

平面的に遺構表示をした。

この建物遺構の整備手法は、後二の丸、本丸西側平坦地においても実施した。また、鳥越城跡の本丸、櫛形門、中の丸の区域における史跡整備については、本丸は鈴木出羽守時代と思われる遺構の整備を基本とし、櫛形門と中の丸の区域は織田方と思われる遺構を基本として史跡整備を実施した。

門復元は、当初、鈴木出羽守に指導された白山麓本願寺門徒が、本丸門を構築していたが、織田方であった柴田勝家軍の攻撃により焼失し、戦後処理を行った柴田軍により、櫛形門と中の丸門が建築されたとの発掘調査の結果にもとづき、柱形式、建物形式、屋根形式、屋根葺材に復元手法の違いをもたせた。

本丸門は、鈴木時代の設定で、建物形式は掘立柱形式の矢倉門、屋根形式は切妻造妻入、屋根葺材は流し板葺とした。

櫛形門は柴田勝家軍時代の設定で、建物形式は礎石建の高麗門とし、屋



本丸整備



本丸整備



本丸門・柵形門復元

根形式は切妻造平入、屋根葺材はとち葺とした。

中の丸門は、柵形門と同じ時代設定で、建物形式は礎石建の矢倉門とし、屋根形式は切妻造で、屋根葺材はとち葺とした。屯舎は、中の丸に所在することから柴田時代の想定で、建物形式は礎石建の木

造平屋建、屋根形式は切妻造で屋根葺材はとち葺とした。屯舎は南北十間の長さを持ち、倉庫部分と居住部分を兼ねていたという想定で、南側六間を倉庫部分として、土間にし、見学者が休憩できるように、丸太を加工して、椅子とテーブルを設置した。北側四間は、居住部分という想定で、板床にし、史跡管理用具を保管することにした。

この建物復元等の整備をふまえて、各郭の史跡整備を順次実施した。

本丸では、土塁と柵列復元を実施した。土塁は本来人影が隠れる高さと思われたが、史跡見学者の便を考慮し、高さを三〇センチにおさえ、広がり方を平面表示した。柵列は鈴木時代という本丸整備の時代設定を考慮し、半割丸太を荒加工して、風による倒壊防止の支えを持た



中の丸門・屯舎復元整備

せて設置した。この柵列に対し、中の丸・柵形門の柵列は、屯舎、柵形門に附属する防備施設として、織田方の時代設定で、成形加工し、適宜銃口を設けた。本丸東側の窪み部分は、遺構状況より、井戸跡と判断されたので、井戸枠を設置した。

本丸北側で、大甕が三固体頸部まで地

中に埋められた状態で検出されたことから、検出状況が見学者にわかるように、レプリカを作成して、検出された場所に

設置した。

史跡等活用特別事業で、実施できなかった、後三の丸とアヤマガ池周辺、後二の丸の南側と西側空堀の整備および便

益施設（公衆便所）の設置については、平成十三・十四年（二〇〇一・二）にかけて実施した。

後二の丸南側斜面で検出された地山に含まれる石は、石垣のような様相を呈していた。非常にもろい石なので、地中にもどすことを検討したが、山城としての性格を示す遺構として、保存処理をほどこし整備した。

後二の丸西側空堀の南端で、本丸西側へ至る土橋が検出され、幅とレベルを考慮し、遺構の所在がわかるようにした。

アヤマガ池の南側下部に、木樋が検出された。多くの部分が地中にあるため、地中に埋め、検出状況を写真で表示した。

（波佐谷 聡）



本丸大甕出土整備



あやめが池の整備